

乾シイタケ栽培における1年起こし栽培技術の検討

林業研究部 きのごグループ

1. 研究の背景

乾シイタケ原木栽培において、接種2年目の秋以降にほだ木をほだ場に移動するほだ起こしが行なわれている(通常起こし)。しかし近年、伏せ込み中のほだ木は、夏期の高温による影響が懸念されている。また、秋期には、様々な作業が集中することで、ほだ起こし作業の遅れが散見される。1年起こしは接種2年目の夏までにほだ起こしを行う方法で、2年目の夏期の高温を避けるとともに、作業の分散化を図ることを目的としている。一方、シイタケ発生前のほだ木の移動刺激がなくなり、発生量減少が懸念されることから、接種1年目の12月にほだ起こした1年起こし栽培技術の確立に向けた研究を行った。

2. 研究成果の内容・普及のポイント

- ①通常起こしでは発生量が1/2程度まで減少する年があったが、1年起こししたほだ木からは安定した発生量が確保できた(図1)。
- ②1年起こしは3品種(ゆう次郎、290、327)で発生量が増加した(図1)。
- ③1年起こししたほだ木を秋に散水打木することで、秋期の発生量は増加し、1年目の総発生量も増加した(表1, 図2)。
- ④1年起こしに取り組む際は、1年分のほだ場の確保が必要なため、生産者の生産状況に応じて普及していく。

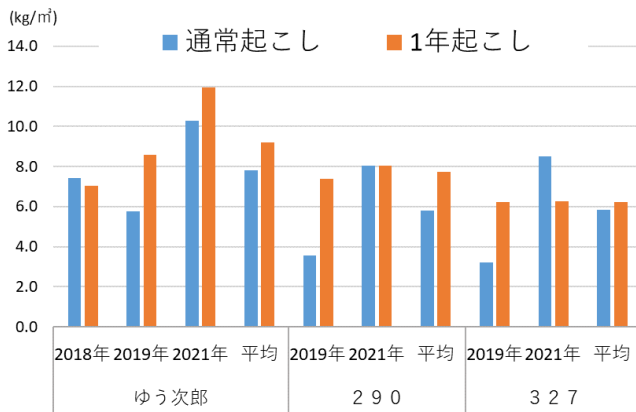


図1 1年起こしと通常起こしの発生量



図2 秋期の散水打木効果(ゆう次郎)

表1 試験区毎の期別発生量(品種:ゆう次郎)

試験区	期別発生量 (kg/m³)			合計
	秋期	冬期	春期	
通常起こし (ほだ起こし: 2018/10/29)	0.2	1.7	5.5	7.4
1年起こし (ほだ起こし: 2017/12/21)	0.1	1.6	5.3	7.0
1年起こし+散水打木 (ほだ起こし: 2017/12/21、散水打木: 2018/11/1)	2.5	0.4	5.5	8.4

3. 期待される効果

- ・通常起こしよりも1年前倒しでほだ起こしすることで、発生量は安定する。
- ・1年起こしにより、作業の分散化と品種や気象条件に応じた発生操作が実施できる。

4. 担当機関連絡先

林業研究部 きのごグループ

TEL:0974-22-4236

住所:豊後大野市三重町赤嶺2369